

研究指導教員：中原史生教授

学籍番号：11600018

氏名：佐久間 崇

要旨

本論文は、攻撃行動を攻撃者と被攻撃者、双方の行動随伴性の相互作用として捉えるモデルを構築すること、そして、そのモデルを、被験体にハトを用いた消去誘導性攻撃行動 (extinction induced aggression 以下; EIA)の実験事態で検証することを目的とした。本論文は、3部から構成されている。

まず、第I部では、これまでの攻撃行動研究について概観し、課題について議論した。近年の攻撃行動研究の動向を調べるため、2015年から2017年に *Aggressive Behavior* に掲載された論文を概観した。その結果、近年の攻撃行動研究で精力的に調べられているテーマは、Intimate partner violence やいじめ、といった攻撃者と被攻撃者の双方の関わりによって生じる攻撃行動であった。しかし、これまで、攻撃者と被攻撃者の双方を含めた攻撃行動研究はほとんど行われていない。そのため、攻撃者と被攻撃者の双方を含めた攻撃行動を捉える枠組みが必要であると考えた。

第II部では、上記のような枠組みを行動分析学の視点から構築することができると考え、行動分析学の視点に基づいた、攻撃行動を攻撃者と被攻撃者の行動随伴性の相互作用として捉えるモデルについて提案した。そのモデルでは、攻撃者の攻撃行動は、被攻撃者の存在や行動が随件事象として機能している。しかし、このモデルは理論的に導かれたものであり、実証的に調べられていない。そこで、第III部では、このモデルを実証的に調べるために、EIAの実験場面を用いて検証した。EIAとは、連続強化から消去条件に移行すると、隣接する他個体を攻撃する現象である。本論文では、EIAを生起するハトを攻撃バト、そのEIAを受けるハトを標的バトと呼ぶ。

第III部では、これらの目的を達成するため、実験を5つ行った。実験Iでは、標的バトが拘束されておらず、攻撃バトと標的バトの間にアクリル板を介した場面で攻撃バトがEIAを生起するかを調べた。その結果、攻撃バトはEIAを示した。実験IIでは、標的バトが、攻撃バトのEIAの弁別刺激として機能しているかを調べるため、各攻撃バトを異なる標的バトと組み合わせたときの攻撃バトのEIAの反応率を比較した。その結果、攻撃バトのEIAは、標的バトが代わるとその反応率を変化させた。実験IIIでは、攻撃バトのキーつつき行動とEIAのそれぞれの機会当たりの反応間隔が互いに影響しているのかを調べた。その結果、攻撃バトのキーつつき行動がEIAに影響を及ぼすことはないが、EIAの反応間隔がキーつつき行動に影響する可能性が示された。実験IVでは、標的バトの行動が、攻撃バトのEIAの強化子として機能しているかどうかを調べるために行われた。その結果3羽中2羽において、標的バトの行動が、攻撃バトのEIAに影響していることが明らかとなった。実験Vでは、攻撃バトのEIAが標的バトの行動(逃避ないし回避行動)にとって負の強化子として機能するかどうかを調べた。その結果、標的バトのつつき行動は、攻撃バトからの回避・逃避による影響を受けていたが、それらの事象が明確な強化子であるという結果は示されなかった。

以上の結果，攻撃バトと標的バトの行動は互いに影響しあっていることが明らかとなり，本論文のモデルは，攻撃行動について調べるための枠組みとして妥当であることが示された。

Keywords: 攻撃行動，消去誘導性攻撃行動，行動分析学，行動随伴性の相互作用，ハト